

学校図書館に人がいる！

－大分市学校図書館支援員としての2年半を振り返って－

川崎 芳子

はじめに

大分市の小中学校の学校図書館に人が配置されるらしい・・・と初めて耳にしたのは、2007年夏休みのことでした。《学校図書館を考える会・大分》のメンバーとして、「学校図書館に人を・・・」との活動に参加していた私にとってその知らせは驚きであり期待でもありました。しかし、年度途中での採用、小中学校2校に1人の配置など、詳しいことが分かってくると疑問に思うことも多く、はたしてこの先、どのように展開していくのだろうかと不安を感じたのも事実です。

その半年後、前任者の退任に伴い、紹介を受け、小学校2校、大分市立桃園小学校と大分市立明治北小学校の学校図書館支援員として勤務することになりました。

手探りの1年目

大分市の図書館支援員の1年は、4月21日頃に始まります。学校は、新年度がスタートし、授業参観や学年PTA、遠足、家庭訪問、PTA総会、と毎日がバタバタと過ぎている時期です。そのため、図書館運営に関しての話や、前任者からの引き継ぎ事項などを図書館担当の先生とゆっくり話す時間もなく図書館を任せ、あわただしく支援員としての1年目はスタートしました。

まず、図書館を見回し、書架を眺め、蔵書を知り、自分が何をすべきなのかを見つけなくてはなりません。1番に問題に感じたのは、配架の状態でした。長年、学校司書がいなくても図書館を運営・管理していたためか、両校とも、蔵書の分類があいまいで、本が整理されていないと感じました。明治北小学校は、その年の夏休みに図書館のPC導入が決まっていたので、なおさら蔵書の整理が必要でした。

1年目の前半は仕事に慣れ、学校に慣れ、配架を見直し、本を移動し整理することで過ぎていきました。しかし、そんな中でも、子どもたちと本を繋ぐ手立てとしての読み聞かせは是非したいと思ひ、先生方に申し入れました。幸いなことに、両校とも勤務日に1年生の図書の時間が組み込まれていたため、1年生から読み聞かせを始め、他の学年も図書の時間として図書館を利用するクラスにはなるべく読み聞かせや本の紹介をしていくように努めました。その甲斐あってか、子どもたちが図書の時間を楽しみにしてくれるようになり、担任の先生方との信頼関係も徐々に築いていくことができました。

問題の出てきた2年目

支援員としての2年目は2009年4月20日にスタートしました。継続して勤務できるのだろうかという、不安を抱えたまま年度末を迎えたので、新年度になり引き続き採用されることが教育委員会からの通知で正式に決まった時は、ほっとしました。このような不安定な雇用形態には、今もって疑問を感じています。

さて、2年目は前年度の経験から、図書館を学校教育にもっと役立つものにしたいという思いをもって臨みました。教育課程や学校行事予定などにしっかり目を通し、選書や、掲示・コーナー作りなどの環境整備、図書の時間の読み聞かせや本の紹介などの全てを学校教育に寄与するという観点から、考えていくようにしました。これらのことは、学校図書館である以上当然のことなのですが、大分市の学校図書館支援員の勤務形態から考えると、意識しなければとても難しいことでもありま

す。採用の時期が1学期がスタートしてからのので、年度当初に図書館の年間運営計画を話し合うことができないこと、1校当たり週2日・12時間の勤務（年間1校当たり419時間・約70日）に制限されていて、先生方との打ち合わせや、話し合いをする時間もほとんどないこと、日々動いていく学校教育の中で、職員会議に出席することもなく、学校の状況を把握するのは本当に至難の業であること・・・などの理由からです。先生方とはメモ書きで連絡をとりあったり、廊下や職員室で呼び止めて、積極的に相談に乗ってもらったりして、少しずつ前進できたかなと思っています。

また、支援員としての問題も見えてきました。大分市の図書館支援員は毎学期の初日に3時間（年間計9時間）ほどの研修を受けますが、それ以外は正式には、研修の機会は全くありません。図書館での仕事は専門性が求められ、常に勉強が必要と思われませんが、それだけの研修ではとても足りません。各支援員の取り組みにもばらつきがありました。そこで、有志で「子どもと学校図書館の会」という支援員で構成する自主研修グループを立ち上げ、支援員が研修する機会を設け、お互いに協力し合って支援員全体の力量を高めていくことにしました。この会の活動は順調に続いており、この10月に4回目を実施しました。会の活動を認知してもらうため、活動内容は必ず市教委にも報告するようにしています。

真価の間われる3年目

大分市に図書館支援員が配置されるようになってから今年9月で4年目に入ります。昨年度末から、「実績を出してほしい」ということが言われるようになってきました。単刀直入に言い換えれば、「貸出冊数を伸ばしてほしい」ということです。目に見える数字で成果を現すことを求められているのです。それだけを学校図書館の評価基準にしないで欲しいという思いはありますが、仕方ありません。現に、私の勤務校での実績はあまり芳しくなく、読書量を増やす取り組みを考えなくてはいけないのも事実でした。そこで、今年度は、読書量アップを目指し、いろいろな取り組みを始めているところです。ただ、単に数字を伸ばすことを目的とするのではなく、本好きの子どもを育て、読書の幅を広げ、不読傾向にある子どもを減らし、学校全体で取り組み、それらが、結果として貸出冊数の伸びにつながることを目指しています。

支援員としての3年目もまだまだ手探り状態なのかも知れません。しかし、学校図書館に週2日とはいえ、「人」がいるということは、教職員の間にも、子どもたちの間にも、定着してきたように思います。そして、「人」がいることで学校図書館が少しずつ変わってきているのではないのでしょうか？学校図書館に「人」がいる…ということを絶やさないためにも私たちは、日々努力しなくてはならないと思っています。

最後に、勤務校の図書館担当の先生が、「図書館支援員が配置されて、学校図書館がどのように変わったか」について述べた言葉を紹介します。

- ・ 週2日の各時間に学年に応じた読み聞かせをしてくれることで、子どもたちの本への興味が広がり、あまり本を読まなかった子どもも、本を借りるようになった。
- ・ 図書館の環境が整えられたことで、図書館が魅力のある場所に変化した。
- ・ 子どもの読書傾向に応じた選書をしてもらい、子どもたちに良書が届けられた。
- ・ 各教科において、支援員さんが資料として役立つ本を探して揃えてくれたり、読み聞かせをしてくれたりすることで、図書館の本を、授業にもとても活用できるようになった。

だから、学校図書館に支援員は欠かせないのだ・・・学校図書館は絶対必要なのだ・・・と言われるように充実した仕事をしていきたいと思っています。

（かわさき・よしこ 大分市学校図書館支援員 担当：大分市立桃園小学校・大分市立明治北小学校）

